

今回は、「オーストラリア通信」に代えてオーストラリア人による図書を一冊紹介させていただく。前回のウィッチェティグラブの記事でも書いたように、アボリジニの食料調達方法が白人接触以前は狩猟採集であったというのは、やはり主流の考え方であろう。しかし、幸運にも本書に出会い、自分の狭い視野が広がることとなった。

著者ゲリッツェンは、アボリジニ社会における「新石器時代農業」とも呼べる多品種の食料生産と定住生活の展開を、研究の中心課題としている。これは、オーストラリアの先住民は狩猟採集生活を営む移動民族だったという従来の解釈と大きく対立している。今世紀に入り、アボリジニの伝統的根栽農耕(焼畑)が果たす環境への役割が注目されるようになってきたとともに、本書は歴史的な新事実を提示しているといえよう。

本書は効果的に自説の論拠を示すべく三層の構成からなっている。まず、オーストラリア社会に確立されたパラダイム、つまり白人オーストラリア人の持つアボリジニ社会に対するバイアスについて論じ、次に、オーストラリア大陸全体の概観を与え、さらに、1,250以上の文献を検証している。本書における著者の取り組みは多岐にわたるもので、民俗誌や考古学の資料を統合的に分析・再検討し、引用・脚注等も行き届いている。これまでのヨーロッパ人探検家や民俗学者による先住民の食料保存、灌漑水路や永続的な居住地についての点在する観察記録から、本研究に適切な事例を著者が十分に引き出してきたといえるだろう。

著者は、「原始的農業」と見られる土地資源の活用がオーストラリアに存在したとの判断を躊躇させるものはオーストラリア白人社会の持つバイアスであることを強調している。たとえば、植民地支配の違法性に対する様々な隠蔽があったり、一部地域の調査で見られた狩猟採集的な生活を大陸全体に共通とするものという短絡的な考え方であると指摘している。アボリジニの食料生産方法の空間的・時間的多様性を無視するものであるという主張である。

著者は、定住型・原始的農業が様々な形で大陸に存在し、完新世後期⁽¹⁾にその数が増加したものと見ている。アボリジニは様々な作物の中で品種選別、増殖、播種や伐採を行ってきた。白人が作った居住地以前からあった「居住地」で、アボリジニは食料貯蔵・備蓄として余剰生産物を保存してきたのである。しかも、その方法は大陸の気候地域区分によって異なっていたという。スピニフェックス草⁽²⁾のみが分布する中央乾燥地域では焼畑と播種しか行われず移住生活的な要素が強かったが、コーナズ地域⁽³⁾の砂漠地帯では熱心に食料生産を営む集落も存在したという。

本書で報告される作物品種の多様性と農場の規模には圧倒される。まず、19世紀の探検家ミッチェル少佐⁽⁴⁾がダーリン川上流地域で14km以上に亘る乾燥わらの山々を目撃した、という事例がある。野生タマネギ、スベリヒユなどの種は部族間の貿易を通じて大陸全体に拡散したという。ノーザンテリトリーの亜熱帯草原地域では、1キャンプ⁽⁵⁾につき1tの食料貯蔵を有していた。また、20kg以上詰められた穀物の袋が、南パークリーからエア湖盆地という大陸半分の距離間で取引され

ていた。砂漠地域では給水も重要な問題であるが、たとえば、ニューサウスウェールズのブルー平野では100mの距離を灌漑することができた。特定品種を増産させるためには除草も行った。これらの作業と同時に、アボリジニはカンガルーやエミュ、ペリカン、魚類のような動物をも罫、放牧、移送などによって「管理」してきたのである。

アボリジニ社会を研究対象とする人類学者からは、本書に対し、多くの異論が提起されるであろう。その理由の一つとして、形而上的概念であるドリーミング⁽⁶⁾、あるいは先住民の慣習法について、本書ではほとんど取り上げられていないということがある。ドリーミングは、現在でもカントリーに住まう神霊の下、アボリジニの行動と人間関係を形作り、経済活動を左右しているのである。本書が残した課題は、アボリジニの生産に向かう態度と関連性がドリーミングに対してどのように解釈されるかということである。

今後の研究においては、白人接触以前のオーストラリアにおける社会・政治地理学について、食料生産体系の環境的要素を分析する学者も現れることだろう。また、雨季にのみ行われたとされる大規模な食料貯蔵についての時間的分析は、ゲリッツェンの研究を発展させ、さらには地球温暖化の気候変動における地域規模の食料生産方法の革新といった現実的問題に拡張できる可能性を含んでいる。さらに、原始的農業が播種と収穫以外の作業を行わない自然に任せた栽培であったという点で、Do-nothing Farming(自然農法)やFukuoka Method(福岡農法)などと呼ばれて海外でもしばしば取り上げられる日本生まれの農法にはそれとの共通点があるため、今後の広領域分野からの総合的な比較研究も期待される。

常識が覆されるときには、大きな動揺を呼ぶものである。遠隔・乾燥地帯のアボリジニに対する農業・畜産業を薦める推進派の政治家が本書を彼らの主張の正当化のために用いることはあっても、アボリジニの伝統的生産方法の空間的・時間的多様性を認識することは少ないだろう。一方、アボリジニ土地所有権の支持者は本研究を彼らの追い風と見るかもしれない。また、アボリジニの人々が読めば、彼らの主張の正しさ、つまり白人の入植以前よりも遙か古代から洗練された方法で偉大なる大地を守ってきたという伝承の正当性を見出すかもしれない。文明化によりアボリジニが苦難を被ったのか、むしろ恩恵を受けたのかを巡って議論が揺れる中で、オーストラリア社会の新たな和解のプロセスに貢献する可能性を持った本書の存在意義は大きい。

[註]

- (1) 地質時代区分で、新生代第四紀で最も新しい第二の世であると同時に、現代を含む。沖積世。
- (2) Spinifex。オーストラリア内陸の乾燥地帯・半乾燥地帯を好む野草。
- (3) Corners Region。南オーストラリア州、クイーンズランド州とノーザンテリトリー準州の境界にある地域。
- (4) Major Sir Thomas Livingstone Mitchell。「広大で肥沃な土地の地域」を発見したことで名声を上げた。
- (5) アボリジニ英語では「家」を意味する。血縁やスキンネームによって決められる居住集団で、12から15人が住める家屋もあったという。
- (6) Dreaming。各先住民言語グループによりJukurrpa, Wapar, Altyerrなどと呼ばれる概念を英語に訳したもの。